

正宗文庫目録（五十音順、典籍編）

正宗文庫調査班

はじめに

正宗文庫は、歌人・国文学者正宗敦夫氏（以下敬称略）の蒐集した典籍文書類を収蔵する文庫である。生地であり生涯を送った岡山県和気郡伊里村大字穂浪（現・岡山県備前市）に創設され、昭和十一年六月に財団法人の認可を受けた。敦夫の没後は、令息甫一氏（平成元年五月、八十四歳で没）、令孫千春氏によって引き続いて管理運営され、現在に至っている。

国文学研究資料館では、平成十四年度より毎年二―三回、主に古典籍（一部明治以後の刊本・稿本も含む）を対象として調査を実施してきた。このたび、古典籍の調査については目録未登録分の調査が一、四〇〇点に達したところで、収集（撮影）を開始した（毎年一〇〇―二〇〇点、一二、〇〇〇コマ程度をマイクロフィルム撮影し、国文学研究資料館に於いて公開することになっている）。そこで文庫の御許可をいただき、膨大な蔵書

の全体像を把握すべく、典籍の目録を本誌上に掲載することにした。以下、若干の蔵書の概要と現状について記す。

調査に参加した調査員は、石川一・海野圭介（平成十九年度）・川崎剛志・広嶋進（平成十八年度）・深井紀夫（平成十八年度）・山本秀樹の六名である（敬称略）。他に国文学研究資料館の担当者として小川剛生が加った。後述するように目録の記載には各自の調査カードの記述をそのまま生かしたところがあるが、編纂上の責任は小川にある。

文庫の調査・整理は、典籍以外にも対象を拡大して継続中であり、スベ―スや対応する人員にも限界があるため、資料の閲覧については要望に必ずしも沿えない場合がある。なお、文庫資料に関する問い合わせは、正宗文庫調査班の現メンバー、石川・海野・川崎・山本・小川のいずれかに寄せらるたい。

正宗敦夫の生涯と学問

正宗家は備前国でも屈指の旧家である。家号を亀屋と号し、江戸後期、雅明（天保三年没、七十歳）の代より網元・材木商・地主を兼ねてことに家運隆昌した。^{〔1〕}その後、雅敦（天保九年五月没、五十歳）・雅広（明治三十四年三月没、七十五歳）と相承けて明治維新を迎えたが、当主は好学で国学者の門を叩き、また狂歌・俳諧の作者として遠く上方・江戸にも知られ（とくに雅敦は六樹園石川雅望の高足で唐樹園南陀羅を号している）、みずから歌文の出版に手を染めるなど、文雅を愛好する一族として有名であった。遺愛の本はなお文庫に若干数をとどめる。

雅広の後、両養子として迎えられた浦二（昭和九年四月没、八十一



図版1 正宗敦夫（昭和20年代末頃）

歳）・美禰（昭和十七年四月没、八十三歳）の夫妻には七男三女が生まれた。長男忠夫（白鳥）のほか、洋画家の得三郎、丸山氏を冒して実業界で活躍した五男、植物学者となった敬敬といった各界の著名人を輩出したが、ひとり故郷に在って家業を継いだのが二男敦夫である。

敦夫は明治十四年十一月十五日生まれる（戸籍上は同月三十日生）。十六歳で高等小学校を卒えると、父の命により商家の仕事に従事した。さまざまな事業に手を染めたいが、「敦夫は商売よりも読書又は新聞に投書^{〔2〕}を好む」と、和歌・学問に傾倒し、旺盛な文学活動が展開される。「私は青年時代は父の云ふまゝ、に物品販売業をしてゐたから、仕入に岡山へはよく出かけた、其で先生にもよく御目に懸つた。」^{〔3〕}とある如く、当時第三高等学校医学部眼科教授であつた歌人井上通泰の弟子となつた。通泰が岡山を離れた後も、終生親しく教えを受けたことは有名である。

通泰を介して、最後の桂園派歌人といふべき松浦辰男・池袋清風の聲咳にも接した。さらに伊藤左千夫・森鷗外・与謝野寛・同晶子・齋藤茂吉・山田孝雄・橋本進吉・新村出・澤潟久孝などの歌人・文人・学者とも交際があつた。^{〔4〕}地方にいながらくも広い交友を有したことは驚くべきである。また、そのことで学問を培つたことも自身が認めている。

当時の歌人が多くそうであつたように、敦夫は早くに万葉集に傾倒したが、学問的に正確に読み解こうとする態度を貫いた。そして集中すべての表記と訓とを明らかにすべく、独力で『万葉集総索引』（白水社、昭和六年十一月）を編纂するという偉業を達成することになる。

敦夫は作歌にいそむかたわら、若い頃から直接の先輩である郷土の歌

人の事蹟を明らかにすることに意を用いた。香川景樹の弟子で岡山桂園派を支えた木下幸文・菅沼斐雄・高橋正澄らの資料が文庫には多く遺され、若き日の敦夫自ら写したものが少なくない。郷土の歌人・文人の詠草や著作を蒐集したことが、蔵書の一つの核となったのである。

そして地方にあつて必要な書物を得難き不便が身に沁みていたのであろう、学問上の不利と散佚の危険を少しでも軽減するべく、未刊の作品を出版し提供することを企てた。早くも明治三十六年、二十三歳のときには、桂園派歌人の詠草・著作を中心として、稀覯本をガリ版刷りで複製頒布する歌文叢書の刊行に着手している。これは活字拾い、印刷、校正、製本など、文字通り家族を動員しての家内工業であつたという。いずれも会員制で予約部数を刊行するものであつたゆえに、これらの出版が可能となつたと思われるが、徹底した利他的的精神には驚くべきものがある。

そして、この企画は、歌文珍書保存会（明治四十二年～昭和二年。近世歌学書十九点その他）を経て、与謝野寛・晶子との共編たる日本古典全書（大正十四年～昭和十九年、六期、二百六十六冊）へと発展する。敦夫は度々上京しては組版印刷にも細かく指示を与えていたが、やがて与謝野夫妻はこの事業から手を引き、第三期以後の出版は敦夫一人の企画であつた。⁽⁵⁾ その頃「一般文芸的の物はやめて純学術的のものだけをやることにした。読者はずつと減つて商売にはならんが、これも学問への仕事だと思つてやつてゐる。」⁽⁶⁾と語つた通り、研究上必須のものながら、大部そのほかの理由で出版の機会を逸してきた文献を公刊している。正確な刊行点数は敦夫本人ですら把握していなかつたといわれるが、古典作品の普及、

かつ研究の基盤整備のために大いに貢献したのであつた。「諸家傳」「地下家傳」「節用集」「類聚名義抄」など研究上必須の古字書・人名録は、現在なお日本古典全書本が扱ふべきテキストとして覆刻され広く利用され続けているのである。

さらに、この時期にもなお理もれた学者・歌人の事蹟を明らかにするとともに没頭し、基礎資料の紹介に挺身した。「熊沢蕃山全集」（同刊行会、昭和十三年～十八年）の刊行、小著ではあるが「大隈言道歌集 草徑集」（岩波文庫、昭和十三年）、「香川景樹歌集 桂園一枝」（同、昭和十四年）の刊行が特筆される。

戦後、昭和二十七年四月には岡山に新設されたノートルダム清心女子大学の教授に就任し、没するまでその職に在つた。昭和三十三年十一月十二日、自宅において七十八歳で逝去した。墓所は文庫裏手の柳青院、正宗家歴代の塋域にある。

正宗敦夫の学問的な評価はまだこれからである。前記の未刊資料の紹介、諸本の校訂、そして索引類の編纂へと精力を傾けたため、その学識を直接に披露した著作は遺されず、纔かに歌人の小伝や歌語の考証が散在するのみである。そもそも、敦夫には、自らの才学を誇示するところが全くなかつた。但し、最晩年の講義ノートを没後に活字化した「金葉和歌集講義」（自治日報社、昭和四十三年十月）では、錯綜する諸本の関係を明らかにしつつ、本文の校勘を出発点とする考証学的学風を見せている。契沖・真淵・宣長・広足から通泰に及ぶ国学者の学書を縦横に引用しての語注、歌人としての感性を十二分に生かした口語訳には、その学問の片鱗を

窺うことができる。

蔵書の概要と特色

敦夫は少年の頃より書物を愛好する余り、若年より「衣食ヲ節シて是ヲ購」ったことを告白しているが、地方で学問を続けることの不利を克服するために、必要

なものはずべて集めるといふ姿勢をとったのであろう。

他方、自らが蒐集した資料を他人に公開することにも積極的であった。明治三十七年二月には、自宅書庫を開放して児童図書閲覧所を開設、数年に及んだことが指摘されて

図版2 創建当時の正宗文庫（記念絵葉書より）

いる。⁽⁸⁾叢書刊行の企画と並行して、文庫図書館を建設し自らの蔵書を公開して一般の利用に供する構想は早くからあったものと思われるが、それが具体化するのには日本古典全書の刊行が一段落した五十歳代のことであった。昭和十年八月、財団法人正宗文庫の設立の認可を受け、翌十一年六月、自邸より北へ数百メートルほど登った高台に、鉄筋コンクリート二階建ての書庫を独力で完成させた。研究にはふだん二階を用いていたといい、自身が使用した図書・資料が座右に置かれている。一階には天井にまで届く木製書架を四面および南北方向に立て列べた。こちらはジャンルによってゆるやかに分類収納されている。建物は何度かの改修を経たが、なお創建当時の面影をよくとどめている。

さて、その「財団法人正宗文庫設立趣意書」の前段を引用してみる。⁽⁹⁾

我レ今正宗文庫ヲ財団法人トシ以テ永久ニ保存ヲ謀ルノ計画ヲ立ツ。蓋シ我が国ノ刊本其ノ源ハ奈良朝ニ発スト雖現存セルモノハ極メテ希レナリ。平安朝ノ物ハタ然リ。鎌倉期ノモノハヤ、存スト雖モ、天下ノ至宝トセラル。慶元ノ頃ヨリ大ニ文教開ケ、其ノ開版ノ書モ少ナシトセズ、然モ今日其ヲ求メントスルニ、大抵ハ稀覯ニ属ス。四百年ヲ経過スレバ圖書ノ大半ハ散佚スルコトヲ証シテ余アリ。我レ田舎ニノミ住シテ典籍ヲ見ルコトノ極メテ難事ナルヲ歎ジ、希覯ノ書ニ至リテハ百里ヲ遠シトセズシテ往訪シキ。而モ未ダ眼福ヲダニ得ザル物数ヘ盡シ難シ。我性、少年ノ頃ヨリ圖書ヲ好愛シ、衣食ヲ節シテ是ヲ購フ。然レドモモトヨリ希覯書ニ及ブコトアタハズ、亦其ノ数多シトセズ。然レドモ今知命ヲ過ギテ還暦ヲ遠シトセズ。今ニシテ此ノ蒐書ノ書籍

等ノ保存ヲ講ゼズハ、其ノ散佚ハ遠キニアラザルベシ。今日ノ普通ノ書籍モ、百・二百ノ年ヲ經過スレバ珍籍ノ部ニ數ヘラル、物其ノ幾割ニ及バンコト、既往ニ徴シテ推知スルニ難カラズ。今謀ヲ立テ保存ノ方ヲ講ジ置カバ、數百年後ハ国家有用ノ資料トナランコト疑フベカラズ。(下略)

とある。まずは我が国の刊本の歴史を簡潔に述べて、中世以前の古刊本はもとより天下の至宝である、四百年前、慶長・元和の交より出版も随分盛んとなったものの、それだに今では稀覯に属する、と具体的な例証を挙げて、書物の散逸の危険を憂い、いま文庫を設立して保存の企てを講ずればこの蔵書がいずれは国家や学問のために役に立つことを謳う。「殊ニ我ガ里ハ遠ク都会ヲ離レタレバ土地ノ變遷モ少ク、幸ニ文庫建築ノ敷地モ相応ノ處タレバ、水火ノ難モ亦殆ド無カラム。」と、立地の不便さはかえって圖書の保存には好適であるとし、文庫の設立を契機として、世の名士がこの地を訪れること、ひいては子孫や郷人を学問に開眼させることの効果を説いている。

さて、蔵書概要は、前章に触れた敦夫の学問や出版活動を反映して非常に多彩であり、改めて言挙げするまでもない。専門とした歌学・語学に偏らず、とくに充実したのも、連歌・俳諧・物語・小説・史学・医学・茶道・花道・有識故実と、ほぼあらゆる領域にわたっており、およそ一代の蒐集にかかるというのが信じがたいほどの質量を誇っている。

歌学は主に写本で伝えられる学問であり、写本類が多いのが特色であるが、古刊本に対してもなみなみならぬ知見と関心を抱いていたことは右の

文章でも分かる。とくに木活字版を愛好していたようで、注目すべきコレクション⁽¹⁰⁾となつてゐる。古活字版(敦夫は「古木活字」としている)についても俾覯をなしている⁽¹¹⁾。そして、名家の手澤本・自筆本をことに留意して集めた模様で、ありふれた作品であっても、何らかの書誌学上の価値を有することが多い。

先学も近代出版史における敦夫の業績には注目しているが、しかしその事業を支えたのも書物に対する深い愛着と見識であり、そこには江戸後期以来の書誌学・校勘学のよき伝統が生きていたことを感ずる。まとまった著作こそないが、遺された蔵書の性質一つ一つを探るときに、そのことが鮮やかに窺えるのである。

だいたい、前後二十年にも及んだ日本古典全書の刊行が、ほぼ敦夫一人の力によつて実現したのは、かねてより古典作品の善本の発掘に心をくばり、稀本・珍本を多年にわたり蒐集していたことがその前提となつていたことはいうまでもない。したがつて正宗文庫の蔵書は、たんに敦夫の活動を支えたのみならず、日本の古典学史上の遺産というべき価値をも持つことになろう。

目録と現状

正宗文庫の所蔵となつた典籍文書は、目録に登録されて、番号と保管場所(棚の番号とその位置)が定められた。目録は、「正宗文庫」と柱刻した特製和紙を袋綴本にしたもので、半丁に五点づつ記入させるようになつ

ている。登録された本には蔵書票を見返し右上に貼り、「正宗文庫」の朱印を捺すのが原則である。とくに珍重すべきものには「敦夫珍藏」朱印を捺すことがある。もともと、早くから蔵書の管理には意を用いており、早く明治三十八年の年記を持つ目録がある。

昭和十一年の財団設立を契機として、四種の目録が編纂され、文庫の大要を伺うことができる。敦夫の命名に随うと、つぎの通りとなる。

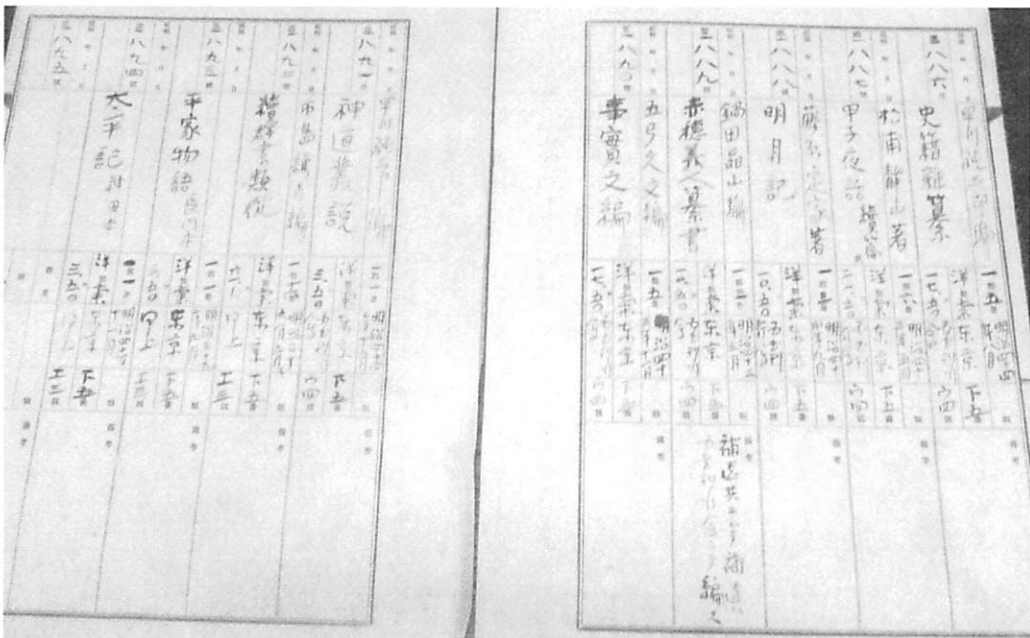
I 「正宗文庫目録」	三九三六点
II 「郷土書目」	二一九六点
III 「師友書目」	七三四点
IV 「短冊目録」	一〇〇〇点

I～IIIの掲載分を合計すれば、典籍は七〇〇〇点二〇〇〇〇冊を大きく越えることになる。

以下、各目録の内容について簡単に解説する。

I が最も根幹となる目録である。全四冊、全ジャンルにわたっており、所載の典籍は和装本が主体であり、若干の洋装本（多くは古写本の複製）が混じる。

しかし、その排列には特定の原則はないようで、配架別・ジャンル別にはなっていない。同じ棚の書物がまとまって記載されている場合もあるが、全体にわたるものではなく、また厳密なものでもない。第一冊は昭和十一年六月、文庫設立時の蔵書を書き上げたものであり、その後も比較的無造



図版 3 『正宗文庫目録』から、おそらく現存する自筆用紙では最後の丁。

作に、入架される都度に書目を記入していったと思われる。

そして番号は三七三一で終わっているが、文庫にはそれより後の番号を持つ書物があるのが不思議であった。その後、未製本ながら、三七三一以後の書物を記入した目録の用紙が見出され、番号は三八九四に達している。その整理は最晩年の昭和三十一年になされたと思われる。

ところで、現在の目録では三三三―三三四〇の一〇点、一丁分が欠落している。その後の調査によつて、このうち六点の書名は突き止められたものの、三三三―三三四、四〇の四点が何であつたかは依然不明である。なお一五六〇―一五九九、および三七三一では、一つの番号が二つの書物に重複して与えられている（そのため本稿の目録ではa・bとして処理してある）。本稿に掲載したのはこの目録である。

Ⅱは「郷土書目」と題する通り、備前・備中・美作を中心とした岡山県に關係する典籍を別置したものである。⁽¹²⁾やはり和装本が主体であるが、やや多く洋装本が混じる。「郷土」の朱方印を捺していることで区別される。敦夫の定義によれば、「郷土書目」とは、

一、岡山県人の著述

二、岡山県出身にして他国へ住してゐた人

三、岡山県に來住せる人

四、岡山県と何等かの關係有る人

五、岡山県の研究に必要な書籍

六、岡山県人又は關係せる人などの筆写せる本又はたゞ岡山県關係者の藏書印など有る為に此の部へ編入せるも有り。

となつてゐる。しかし、自ら「本文庫の郷土書目と云ふのは少々無理な程に範圍を廣くしてゐる。」というように、問題を孕んだ分類である。とくに第六項については、ⅠとⅡとどちらに帰属するかは曖昧である。内容上はまったく岡山県と關係しない典籍がⅡに多く入つてゐるし、逆にⅠにも備前の學者の自筆本・手澤本が相当に見られる。但し、敦夫が取えてⅠから独立させて別置した意圖は尊重されるべきで、この書目を文庫の核とみなしてゐた。前記設立趣意書で郷土に關係する書籍を広く集める意義を次のように説く。「殊ニ其ノ一部トシテ郷土文庫ヲ設ケシコトハ、郷土ニ關スル圖書ハ中央ノ都市ノ圖書館ナドニハ其ノ大略ヲ蒐集スト雖トモ、細ニ入り徹ラ極ムルコトハ到底ナスアタハズ。郷土ニアリテ郷土ノ圖書ヲ蒐集シ、一室ニ其ノ総テヲ盡シ得バ、郷土ノ先哲ノ遺業ヲ明ニシ、カツ郷土研究ニ益ヲ與フルコト甚太ナルベシ」。そして昭和十四年には、甫一氏に命じて書名五十音順に改編した『郷土書籍目録』を謄写版で刊行し、頒布している（但し一一〇七点のみ）。そして深井紀夫氏が改めてⅡの書目を悉皆調査して内容から分類し、『正宗文庫所藏典籍分類目録 郷土關係編』（私家版、平成七年三月）として刊行している。

Ⅲは文字通り、敦夫が直接に交流を有した知己の著作である。番号七三四まで（うち五七六―五八五は欠けており一丁落丁か）。全て明治以後の洋装本である。井上通泰・松浦静雄・山田孝雄・与謝野夫妻をはじめとして、桂又三郎・齋藤茂吉・佐佐木信綱ら歌人・學者の刊行物が見える。やはり昭和十一年六月の編と見られるが、所載される書物のうち最も新しいものは昭和三十一年十二月であり、これも次第に増補されていったことが

窺える。これについても前記設立趣意書に「己レ不幸ニシテ家ヲ離ルルニ難ク、親シク就テ学バンニ師無ク、学友マタ乏シカリキ。惟ダ我ヲ憐ミテ遠クニ在リテ指導セラルルノ師ト、自然ニ学ビノ契リヲ結ブ友ト若干名アリ。其ノ師友ノ寄セ給ヒシ書ト、師友ノ著述ヲ我ガ購ヒテ学ビノタヨリトセシ書ヤヤ数積レリ。是レハ我ガ為ニハ最モ恩恵ヲ蒙レル書ドモナレバ、別ニ一部門ヲ立ツ。今一後、我ガ子孫ニシテ学ニ志篤キ者出デ来ナバ、又此ノ部門ノ圖書ノ自ラニ数積リヌベシ。此ノ部門ノ増加率ハ我ガ家門ノ学問ノ消長盛衰ヲサヤカニ反射スル明鏡タルベシ。」と述べている。

IVは、所蔵した短冊の作者・初句を挙げ、一〇〇〇まで通し番号をふつたもの。後柏原天皇・三条西公条らに始まり、中世・近世の有名歌人が目立つようであるが、同時代の北原白秋・折口信夫に及ぶ。これらは一点づつ厚紙で保護し、五段二列の筆筭に整理されている。珍品と目したものを載せているようであるが、江戸期の国学者たちの筆跡を知るたよりとして蒐集したことが窺える。なお、敦夫は古今名家の短冊の蒐集にはことに力を入れていた。目録掲載分以外にも、短冊帖に貼られたもの、あるいはマクリの形で、夥しい枚数が伝存している。

以上である。典籍を購入することは没年に及んでおり、目録に登録されなかった典籍も相当数ある。たとえば晩年には金葉和歌集の研究に心血を注いで、古写本を数多く購入したが、これらはいずれの目録にも載っていない⁽¹³⁾。古文書・書状・筆蹟・書画類も、たまたま展覧会などに出品されたもので紹介されたものはあるが、目録・台帳などはなく、全体にわたる調査はなされていない。また明治期の文学雑誌なども放置されたままで、ど

のくらの量が残存するのか不明である。さらに典籍以外にも、日本古典全書をはじめ資料叢書のための原稿・校正刷の類が多く遺されており、これらも今や歴史的な価値を持つ。気づいたもののはできるだけ整理するようにしているが、専門的な調査が必要であろう。

これまでの調査と目録の編纂について

正宗文庫の蔵書は、敦夫の研究活動とともに増減を続ける性格のものであり、おそらく本人が把握さえしていればその要は感じなかったためであろう、これらの目録が公刊されることはなかった。

敦夫の没後、蔵書は利用されることが稀となり、文庫の活動も縮小を余儀なくされる。それでも『国書総目録』には「正宗文庫」本が登載されているし（おそらくは前記の目録Ⅱをもとにした『郷土書籍目録』を提供したものと思われる）、昭和四十年代までは「ノートルダム清心女子大学古典叢書」として影印本が数点出され、あるいは慶應義塾大学附属研究所斯道文庫によってマイクロフィルム撮影も行われるなど、公開が途絶えた訳ではないが、その後、建物が老朽化するにもなつて、内部に立ち入ることも制限され、書物を取り出すことも容易ではなかったという。

平成二年夏より現当主千春氏の委嘱を受けて、深井紀夫氏が文庫の整理に着手し、文庫内に散在していた書籍を、目録と照合しつつ、本来の位置に戻し、かつての蔵書形態を復原した。これによって、ようやく文庫は本来の面目を取り戻したのである。目録に掲載されていた典籍がほぼ損失す

ることなく見出されたのは幸いであった。

深井氏は、Ⅱの「郷土書目」掲載圖書の再調査を進められ、二千百九十三点を内容によって分類排列、書名索引を付し、前記『正宗文庫所蔵典籍分類目録 郷土関係編』として刊行した。その後、深井氏はⅠの「正宗文庫目録」に掲載された典籍の調査を開始された。その成果は、年度ごとに公表されたが、⁽¹⁴⁾点数も多く、未登録本が相当にあったため、九六九点を終えた後で中断した。

その後、国文学研究資料館が、深井氏とともに調査を開始した。未登録本は、敦夫・甫一氏父子が研究のために戦後購入したものが殆どで、蔵書票・蔵書印を与えられず文庫のあちこちに放置されていた。その主たる場所としては、二階南側の棚(「上南」とした。とくに重視していたらしい。)、二階に置かれた箱(「別函」として01〜17まで)、さらに一階の通路や書棚の空いたスペース(下一・下二・下三)である。調査済みの典籍には所在と仮番号を記した付箋を夹んだ(目録ⅠⅡに掲載されていないながら確認できなかった典籍が混じっていることもよくあった。これはもとの場所に戻してある)。これと並行して、既に登録されている典籍については、「正宗文庫目録」の順番にのっとって、細目カードによる調査を進めた。

調査の過程で、目録類、とりわけ前記Ⅰの「正宗文庫目録」の有用性に気づかされた。これを電子テキスト化すれば、検索整理が非常に容易になる。また「備考」欄にはその書物の書誌的特色、来歴・由来などのいわば「見所」が簡潔に記されており、敦夫の書物に対する見識の一端が披瀝され興味深い内容になっている。

そこで小川がこれを翻刻入力し、平成十五年十月までに調査した目録未登録本を増補し、書名五十音順の索引を付け、「正宗文庫目録(稿)」(私家版、平成十六年三月)と題して編纂した。敦夫が自らの手控えとした目録に、後世の他人の調査した結果を増補するのだから、文字通りの統括で、文庫の調査途上でもあり公表すべき性格のものではなく、数十部を正宗家と調査員のために印刷するにとどめた。

但し、このような目録でも、文庫では閲覧希望に応じて活用されることがあった。そして未登録の古典籍の調査は、平成二十年十月、一四〇〇点弱に達してあらかた終了した。

これより進んでは、全典籍の分類目録を編纂すべきである。それにはⅠに掲載された書目の悉皆調査を行い、一つ一つの典籍の内容を吟味しなければならぬ。既にそのことには着手しているが、完成にはなお時日を要すると思われる。また、昨今の状況では、大冊となるに違いない分類目録の刊行を引き受ける書肆を見出し難い。まずは典籍の全貌を把握し、ともかくも出納・管理できるようにすることが急務である。

そこで以前に編んだ『正宗文庫目録(稿)』を増補修正した上で、これを書名の五十音順に改編することにした。なお、敦夫自身が生前にⅠを対象として、書名の第一字によって五十音に分類した『正宗文庫圖書目録(仮字分)』を編んで謄写本としている。書名索引の備わった前記『正宗文庫所蔵典籍分類目録 郷土関係編』とあわせれば、とりあえず、すべての典籍について所在を確認することができる。

しかし、ここで繰り返せば、将来には目録Ⅰ〜Ⅳ掲載分、未登録本とを

あわせた、完全な形での分類目録が編まれるべきで、本稿はそのための足がかりに過ぎない。今後調査が進めば、必ずや訂正の要が生じて来るはずである。不十分な点について、大方の御教示を冀うものである。

注

(1) 以下、正宗敦夫の伝記と主たる業績については、吉崎志保子氏「正宗敦夫の世界―階上階下すべて書にして」(私家版、平成元年十一月)を参照した。

(2) 正宗甫一氏「正宗敦夫伝」(『古典研究』第九号 昭和五十七年三月)。

(3) 正宗敦夫「井上通泰先生をしのぶ」(『土』第二十九号 昭和二十八年十月)。

(4) 赤羽淑氏編「正宗敦夫をめぐる文雅の交流」(『近代文学研究叢書8 和泉書院 平成七年二月』参照)。

(5) 日本古典全書刊行企画については、近年、当事者の資料が相次いで紹介され具体的な事情が明らかになった。与謝野夫妻の関与を記した前記赤羽氏編著のほか、香内信子氏「与謝野晶子と周辺の人びと―ジヤーナリズムとのかかわりを中心に」(創樹社 平成十年七月)が、東京で刊行実務にあたった長島豊太郎を探り、さらに森富・阿部武彦・渡辺善雄氏編「『鷗外全集』の誕生―森潤三郎あて与謝野寛書簡群の研究」(鷗出版 平成二十年五月)が、森潤三郎(鷗外の末弟で考証学者)の協力を明らかにしている。

(6) 橋本徳壽氏「正宗敦夫先生」(『青垣』第三十二巻第二、三号、昭和

三十四年二、三月)。

(7) 文業を集成するべく、著作集の編纂が何度か計画され、原稿も集積されたが、刊行を引き受ける書肆がなかったことから頓挫してしまつたという。「正宗敦夫著作目録」(正宗敦夫文集編纂委員会 昭和六十二年三月)参照。

(8) 注1前掲吉崎氏著書による。一二〇頁以下参照。

(9) 正宗文庫蔵。「設立関係書類」と題して一括される。

(10) 正宗甫一・森川彰・多治比郁夫氏編「正宗文庫所蔵近世活字本目録」(『書誌学月報』第二十二号 昭和六十年十月)参照。この目録は目録ⅠⅡを対象とし、二百四十余点を載せる。

(11) たとえば『嵯峨本伊勢物語』(目録Ⅰ、番号四九)・『寛永行幸記』(同、番号六〇)は、いずれも同作品のうちの稀覯の版種であり、早く川瀬一馬が「古活字版之研究」に紹介している。

(12) 深井紀夫氏「正宗文庫所蔵典籍―郷土関係について」(『就実論叢』第二十五号・人文篇 平成八年一月)参照。

(13) なお、この金葉集をはじめとする典籍七〇点四〇〇冊が、敦夫と縁の深かったノートルダム清心女子大学に譲られ、附属図書館で「正宗敦夫文庫」として公開されている。「ノートルダム清心女子大学付属図書館特殊文庫目録」(ノートルダム清心女子大学付属図書館 昭和四十五年三月)参照。

(14) 「正宗文庫所蔵典籍分類目録」(一)(二)(『吉備地方文化研究』第九、十号 平成十年九月、十一年九月)。

附記

深井紀夫^{かすお}先生は平成十九年三月二十五日に逝去された。深井先生おられずして、現在のような正宗文庫の閲覧調査は叶わなかったことは本稿に記した通りである。当館調査員を快く引き受けられ、また「正宗文庫目録（稿）」の倉卒なる入力を誰よりも喜んでくださった御温容を偲びつつ、御冥福をお祈りする。

また今年（平成二十年）は敦夫翁の没後五十年に当たる。生前におよそ名利を求められなかった翁のことは、生地でも知る人が少なくなってしまうというが、蔵書の一端に触れ得た者として、いよいよ畏敬の念を深くする。この目録が、いくばくかでも翁の顕彰と今後の文庫の活動に資するところがあれば喜びである。

前記設立趣意書の一節には「我ガ此ノ文庫ヲ建設セル精神ハ此ノ文庫ノ図書ガ我ガ子孫ニ常ニ新ナル力ヲ發生セシムル源タルベキト信ジテナリ。」とある。翁の遺志を継ぎ、私財を抛って五十年あまり文庫の維持に努めてこられた正宗家の努力こそ、特筆すべきことであろう。常に調査に御協力をいただき、またこの目録の編纂と掲載をお許しいただいた正宗千春氏に篤く御礼を申し上げる。

凡例

一、正宗敦夫の手稿「正宗文庫目録」（以下「目録Ⅰ」と略す）を翻刻し、その規準にのっとって国文学研究資料館調査によって判明した未登録本

を増補し、書名の五十音順に排列した。敦夫以外の人物が加えた記述は「」に入れて示した。なお目録Ⅰは自身の手控えであるので記載は必ずしも厳密ではなく、明らかな誤記等も混じるが、敢えてそのままとした。

一、掲出する項目は、番号・書名・編著者・冊・装訂・大小・刊写年月日・書写刊行者・番号・備考とする。ほぼ目録Ⅰを踏襲するが、購入価格などは除外する。

一、「番号」は、目録Ⅰにしたがって、一から三八九四までを与えた。ついで二階南の棚に別置されていた未登録本は、これに続いて三九〇一～三九八七とした。それ以外の別箱・棚の未登録本はなお精査が必要であり、点数が確定するまでには時間を要するので、今回は番号は与えず、空欄となっている。

一、「書名」は目録Ⅰにしたがった。未登録本については、内題・外題・その他の題の順に優先参照して書名を付けた。内容から判断した場合「」に入れて示した。角書・頭書の類もそのまま示したが、書名の「よみ」からは省いている。

一、「編著者」は代表的な役割を果たした人物を一人挙げるのにとどめた。名称は通行のものによった。

一、「冊」は、単位が「冊」の場合は省略した。

一、「装訂」は、略号によって示してある。目録Ⅰは、おおむね以下の通りであると思われる（但し目録Ⅰのうちでも用法が不統一である場合もある）。

一葉刷・鋪・奉書…一枚物。折…折本。卷…卷子本。仮…仮綴。胡蝶・綴・帖…列帖装。粘…粘葉装。大和…大和綴。洋…洋装本。和…袋綴本を主体とする和装本。

未登録本については、新たに「唐本」「旋風葉」「巻紙」「続紙」という項目を設けた。

一、「大小」は、略号によって示してある。おおむね以下の通りであると思われる。

大…大本。半…半紙本。中…中本。小…小本。横…横本。縦…タテ…縦長本。升…升形本。

但し、書型は、とくに半・中・小については、現在の規準より小さく考えていたようである。同じ本でも齟齬するが敢えてそのままにした。

一、「刊写年月日」は刊年・書写年を和暦によって示す。目録Ⅰでは厳密に刊写の別を記していないことがある。ほかの記載からは判別し難くかつ調査済みであるものは「刊」「写」を補った。

一、「書写刊行者」は、刊行者・書写者とその地域を示す。複数ある場合は代表者一人を掲げて「外幾」とする。

一、「番」「号」は、現在の文庫における配架位置を示す。目録Ⅰにおいては空欄になっているもの、あるいはその場所に見当たらないもあるが、その後の調査によって所在が判明したものは、現時点での位置を示した。その際には、いちいち断らなかった。

一、「備考」は、漢字仮名表記の別まで原文のまま翻刻した。但し、「同上」「右と同じ」等となっているものについては、適宜文章を補った場合が

ある。また「未登録本」については、仮番号と、巻冊の存欠、題の異同、旧蔵者・書写者刊行者に関する情報を中心にして掲げた。

一、この目録を利用して典籍を検索する際には、必ず『正宗文庫所蔵典籍分類目録 郷土関係編』をも併せて参照されたい。